みんなと切ったゴールテープ

大船渡市立盛小学校　六年　畠山　公

今年の六月、小学生として最後の運動会が行われた。とても楽しみにしていたのと同時に、僕は心に決めていたことがあった。

「みんなのために、最後まで一生懸命がんばりたい。そして、みんながんばっている姿もしっかりと目に焼きつけたい。」

そう思うきっかけになったのは、ちょうど一年前の運動会だった。

一

去年、僕は初めてリレーの選手に選ばれた。リレーの選手になれるのは学年の男子で四人だけ。運動会の最後を飾る種目の選手だから、とてもうれしかった。だけど、母にはリレーに出ることを反対されていた。それというのも、その年の三月に病気のために入院をくりかえし、十分な体力がなかったからだ。絶対にリレーに出たかった僕は、母に猛抗議をした。僕の体のことを心配してくれていたのは今ならよく分かるけど、その時の僕には、と

二

ても受け入れられるものではなかった。押し問答の末に、約束をした。

「朝から運動会に参加して、体力的に限界だ」ということになったら、そこから先はすべての競技をキャンセルすること」。

これ以上話し合うのは嫌だったから、その条件で約束した。体力的に限界な様子を見せなければ最後まで参加できる。リレーにも出られる。だからやり切れると思っていた。

運動会当日、五年生の百五十M走で僕の番になって、ピストルの音と同時に走り出した。半分を過ぎた頃、何かがおかしいことに気づいた。足が上がらない、もつれる。僕は前のめりに倒れてしまった。ひじもひざもすりむき、運動着も土だらけ。前を見ると、僕以外はみんなゴールしてしまった。必死に最後まで走ったけど、足はもつれっぱなし。みじめで泣きたい気持ちだった。ゴール地点で待っていた母の姿を見て、リレーには出られないことを悟った。抜けるわけにはいけない組体

操には出たけど、それ以外はテントの救護席で座って過ごした。僕の目にはほとんど何も映らなかった。ただ、悔しくて恥ずかしいという思いが頭の中を駆けめぐっていた。

運動会が終わり、運動会の個人新聞を書く課題が出た。僕は徒競走について書けなかった。ただ起こったことだけで埋め尽くして提出した。数日後、廊下に貼り出された新聞を読んでいたら、あるクラスメイトの記事が目に入った。それは、僕が徒競走で転倒した後も、最後まで走り切ったということをほめてくれたものだった。

僕はとてもうれしくなった。だけど、それ以上に自分のことが恥ずかしくなった。僕のがんばりを見てくれる仲間がいた。それに比べ、どうして僕は自分のことばかり考えて、仲間のがんばりをしっかり見ようとしていなかったのだろう。僕が出られなくなった代わりにリレーに出てがんばった仲間がいるのに、僕は感謝して応援する気持ちを忘れていた。

20×20

そんな僕だからリレーに出る資格がなかった
んだと思うようになった。
ようやく僕は、仲間のがんばりを見られる
人間にならなければならないと思った。そし
て、一生懸命がんばることで、だれかに勇気
を与えることができることにも気づいた。学
習発表会での演劇や児童会執行部に挑戦した
ことも初めから自信があったわけではない。
でも、うまくいくかどうかよりも、一生懸命
がんばれば、見てくれる仲間がいる。その仲
間が「公ががんばっているから、自分もがん
ばろう」と思ってくれると信じて挑戦した。
そして今年、最後の運動会でもリレーの選
手に選ばれた。だけど去年と違ってうれしさ
よりも不安が大きかった。六年生のリレー選
手はアンカーで、下級生の倍の二百Mを走る。
去年、百五十Mで足がついていかなかった記
憶がよみがえった。そしてきっと試されてい
るんだと思った。勝ち負けよりもがんばるこ
とで仲間に勇気を与える覚悟と、僕自身が仲

間の良さに目を配る思いやりがあるかどうか。そのことを意識しながら「本気で走って」と言って迎えたリレー本番、最後に信じられないことが起こった。予行練習ではなかったことだ。なんとダントツ一位でバトンを受け取ったのだ。僕はそこまでつないでくれた下級生の思いを受け止め懸命に走った。ゴールテープを切った後は、他のチームの走りを目に焼きつけようと思った。一位になれたこともうれしかったけど、ようやく自分のことしか考えていない人間から抜け出した気がしたのがそれ以上にうれしかった。

僕には学校や将棋で応援してくれる家族や先生、仲間がいる。仲間の家族の方も応援してくれている。勝つことや成功することではなく、一生懸命がんばることを応援してくれている。だから僕は、勝ち負けでなく、練習でも本番でも、やれることを精一杯がんばり抜くことで応援にこたえられる人に成長していきたい。

20×20